

コクオロシ 石卸 ↓オロシサク 卸作。

コクガ 國下 鹿島郡八田郷に屬する部落。もと國衛があつたからの村名であるとの説と、然らずとする説とある。後説によれば、國下が國衛の訛なることは固より論はないが、この國衛は衛門そのものではなくして、國衛に屬する公田の義である。蓋しこの種の公田は、公領とも國領とも呼ばれたと同時に、亦國衛とも稱せられたのである。而して延喜・延久以降、その地或は社寺に寄進せられ、或は權門の管理に歸して、事實上一種の莊園となつても、尙國領・國衛の名を存したものがあつた。能登の國下の如きは即ち是である。今遽かに何れの説の是なるかを斷じ得ぬ。

コクガク 國學 (一) 國學と雜學—加賀藩の初期に在つては未だ國學の研究に關する運動を見ぬ。そのこれあるは前田利常に仕へた人で、能く源氏物語を解したといはれる澤橋兵太夫を以て、先鞭を着けたものとする。前田光高亦國學に長じ、國文を以て一本種を著した。前田綱紀の時に至り、小松梅林院の僧能順國學を善くした。藩臣今枝近義就いて源氏物語を學ばんとしたが、その居る所相隔るを以て、二人は相約して中途松任に會し、講説を終つたと傳へられる。後年綱紀も亦源語を讀み、寶永三年菅眞靜を京師より聘してその要旨を聽いた。また淺加久敬があり、徒然草を讀み、古今の諸註を對比參校して、徒然草諸抄大成二十卷を著した。これより先、寛文六年田中一閑が京師から來て、綱紀に江戸に仕へ、神道學研究の端こゝに開かれた。一閑は吉川惟足に從遊して、唯一神道の秘蘊

を傳へたもので、貞享二年江戸に於いて神代卷を講説した。一閑の子式如亦惟足に學び、伊勢物語の解釋に於いて最も精しく、音韻の學にも通じ、貞享二年來つて加賀藩に仕へた。その著倭語小解五卷は音韻學に關するものであつた。その他水島右近・中原職俊・同職資等は有職故實に通じ、京師に在つて加賀藩の祿を食み、伊勢貞意・同貞廣は京師より來仕し、並びに綱紀の諮問に應じその研究を助けた。又雜學に由比勝生・杉本義隣・今枝直方・馬淵高定があり、經學詩賦の人にして國學を該れたる者に青地齊賢・青地禮幹があり、史實の雜錄に、制度の隨筆に、訓詁の著述に、各拮据勉勵して綱紀の治世の前後を粉飾した。下つて寶曆・明和の頃に至り、田中式如の義子朋如があつた。文才煥發、古語の語原的解釋を試み、倭語拾補十五卷を撰じた。その説妥當、最も貴重すべきものであつた。而して朋如の門下菅野恭忠は、音韻の學をこの地に流行する謠曲發聲の理に應用して謠要律を著した如きは、最も學問の郷土化したものである。堀麥水の謠曲百番註釋の書を著して寶生流謠曲謔解察形子といひ、佐久間寬臺が終にその内外百二十番の註釋を大成して謠言粗志と題したるも、亦同一傾向の發露である。是と略同時に津田政隣があり、精勵無比、藩初以來の史實を抄録し、また自ら聞見した所を記して世に遺した。政隣記及び耳目甄錄是である。又富田景周がある。和漢の學を該ねて等身の書を著したが、就中國文を以て記したるものには、美文になでしこあり、教訓に

關する史實を輯め、或は藩の典故を明らかにした著述が多い。森田平次その後を受けて出で、藩末より明治に亘りて藩史の研究に偉大の足跡を印した。

山紀談・肥後物語・常陸帶等を講せしめた。田中躬之は京に於いて加茂季鷹に學んだものである。蓋し藩校創立の際皇學の目はあつたが、その後儒學に偏して自ら廢れたのを、ここに至つて再興した譯である。しかも士人の出席聽講する者極めて少かつたから、監友等は之を慨し、屢書を藩に上つてその隆盛を期したが、遂に如何ともすることを得なかつた。此の如きは獨國學のみならず、當時の情勢は儒學に於いても亦頗る不振を極めたのであつた。

下學老談あり、一世の名著越登賀三州志も通俗文を以て書かれた。湯淺祇府も亦加賀藩に

(二) 外來國學者の感化—文政・天保の頃に奥村榮實があつた。門閥にして前田齊奏の知遇を受け、藩校明倫堂の總奉行であつた。榮實和漢古今の書を通讀して著書甚だ多かつたが、その古言衣冠辨は音韻の學に關し、國典異證は神祇の事を論じたものである。榮實曾て富士谷御杖を招いて益を請うたことがあるから、幾分の感化を得たことがあらう。文政十三年言靈派文學の泰斗望月幸智、その學を宣傳せんが爲金澤に來た。こゝに於いて幸智の門に入るもの市を爲し、就中成瀬正敦・前田典義・寺西秀周が最も顯れた。幸智の學は、一番一義の説によつて神典を解説せんことを企てたもので、先づ之に對する言語活用の法を新案し、文法を改造したのであつた。越中の豪農にして金澤に住した五十嵐篤好の如きも、亦之を中村孝道から受けて信奉した。天保の頃橋守部・鈴木重胤來り遊ぶや、士人にして神典を問ふものが多く、石黒千尋・石黒魚淵は重胤の門下であつた。

(四) 國學と勤王家—然るに民間に於いては之と異にして、師を擇んで皇道を聽き、若しくは自ら書を讀んで發明するものが少くなく、彼等は皆天朝と幕府との兩立すべからざる結論に達し、萬延の頃初めて勤王論を唱へる者を見るに至つた。是を以て藩中多數の士が、尙佐幕を可としたるに拘らず、元治元年世子前田慶寧の入京した際、長藩の爲に斡旋盡力した憂國の志士には、眼を國典にさらしたものが多かつた。大野木克敏・青木秀枝・高木有制等が田中躬之の門人であり、不破富太郎が平田篤胤の著書に心醉する人であつた如きは即ち是である。

下學老談あり、一世の名著越登賀三州志も通俗文を以て書かれた。湯淺祇府も亦加賀藩に

(三) 藩校に於ける國學—かく藩外學者の來つて皇學を鼓吹し、士人の漸く覺醒した時に當り、外國との交渉大に緊密を加へたから、我が國體の由來に就いて反省すべく、益古書を編くものあるに至つた。是に於いて藩校明倫堂に在つても、嘉永五年六月その教科として皇學講釋を加へ、田中躬之・石黒千尋を講師とし、狩谷鷹友・高橋日理(後富兒)を補助として、古事記・日本書紀を主とし、藩翰評・常

安政三年菊園田中翁口授、門人等筆記とした一枚刷である。著者田中躬之が、國學を學ぶに就いて、如何なる書を讀むべきかを示したもので、直隗の靈・玉鐸百首・古事記等の書名を擧げ、その書の性質をも略説してある。

コクガクケイコシダイキ 國學稽古次第記

コクコウセイフチヨウ 國公正譜牒 ↓カ

コクシ 國司 ↓カガノコクシ 加賀の國